

はればならないであらう。一々の誤謬を詮索するが如き愚行はやめねばならないが、大家なればなる程層一層の慎重さのあることが望ましい。害益共に影響する所が大であるからである。

筆者は本書の古代及中世の部分に潜む闇が、本書の誇とすべき近世史の光輝にもその隠影を及ぼさざるかを怖れる者である。

(四圓五十錢、教育研究會發行)〔井上〕

○明治史研究

渡邊幾治郎著

近時明治史研究に對する關心の昂まり來れる事は誠に目覺しいばかりであるが、今また元臨時帝室編修官渡邊幾治郎氏の新著明治史研究が公刊された事を喜びとするのである。本書は著者が過去數年公務の餘暇發表された論議を補綴集輯されたもので、篇を分つこと四、政治篇、人物篇、社會編、雜篇等、その各々に數個の論說を包轄せしめて順序よく排列されてゐる。而してその隨所に、多年明治史研究に従事され常に新らしき史料に接する機會を持たれた關係上、從來の誤傳を訂正し、疑問を解消すべき多くの研究が見出される。

就中我々は第一の政治篇、第二の人物篇の諸論に委曲を盡して描かれてゐる、明治時代の政治的大立物に關する記述に、本書の最も重要な部分があると思ふのである。

明治史に於て、殊にその政治的部門に於て、所謂維新の元勳と稱せられる如き、傑出せる個人、特異なる個人が、時代の動向に決定的な役割を果してゐるとは、從來一般に考へられて來

た事である。従つてそれら元勳たちの事蹟の研究は單にそれだけの傳記に終るものでなく、明治時代文化の理解に資する事大なりとされてゐる。

さて本書に於いては、大久保利通、岩倉具視、伊藤博文、大隈重信、山縣有朋等、この時代の政治的中樞をなす人物の事蹟を一々確實なる史料典據を提出して描寫しつゝ、その各章を一貫して明治政治史の展開を示してゐる。即ち太政官時代の藩閥の勢力が、立憲政體への推移の間に、殊に自由改進の二大政黨の進出が顯著となるに及んで、漸次動搖を來したのであるが、しかもかく舊藩閥勢力が動搖するに至つて、却つて官僚と政黨との明確なる對立を齎らすに至つた大勢が理解出來ると思ふ。

著者は本書の説述に當り所々に現今の我國の狀勢と思ひ合されてゐるが、かゝる點に就いてみても正しく現代に於ける好著たるを失はぬであらう。(菊判四一〇頁、定價參圓、東京樂浪書院發行)〔時野谷〕

○御觸書寛保集成

高柳 眞 三
石井 良 助 編

徳川幕府が隨時觸れ示したる所の條章、町方布令、其他の例規等を蒐錄編纂した觸書集成に就いては、池邊義象氏が其の「日本法制史書目解題」の中に天保集成の卷頭の要文を引いて

寛保中有徳公ノ命ヲ奉ジ、慶長廿年ヨリ寛保三年ニ至ル百二十九年間ノ觸書、凡ソ二千五百五十通ヲ以テ八十部五十卷享集トス、俊明公ノ時延享元年ヨリ寶曆十年ニ至ル十七年間ノ

觸書二千六十通ヲ以テ六十五部三十三卷寶曆集トス、文恭公ノ時寶曆十一年ヨリ七年ニ至ル廿七年間ノ觸書三千二十通ヲ以テ六十部五十一卷天明集トス、當代將軍家慶又其事ヲ讃テ、天保八年ヨリ遡リ天明八年ニ至ル五十年間ノ觸書六千六百七通ヲ以テ九十部百八卷天保集トス云々

以上四集成中享保集成、其ノ最初ニ編纂セラレタルモノニテ（中略）所謂吉宗時代ニ於ケル百司政務ノ秩序ヲ大成シタルト同時ニ、又寶曆以降各集成類聚等編纂ノ先驅ヲナシタルモノナリ、蓋シ（中略）之ニ依テ江戸時代法制ノ沿革ハ勿論、時代ノ變遷人情風俗等ノ大勢ヲ想察シタルモノ勸カラズ」と述べられてゐるによつてその要を盡し、また反復するを要しないが、從來僅に二三の秘庫に藏せられてゐるに過ぎなかつたこの一大編纂物が此度高柳石井兩氏の努力により完全な考訂を經、學術振興會の補助をえて出版せらるゝこととなつたのは洵に慶ばしいことである。その初編としてこゝに寛保集成と呼ばれてゐるのは上にいふ享保集成と同一のものでその稱呼は底本となつた内閣文庫本表題に據つたものと考へられる。

菊版千三百五十六頁、全文九ポイント活字廿五字廿行二段密組であるが、句讀點、闕字、等に細く注意されてゐる爲比較的讀み易く、柱書も親切で、幾十冊の寫本を繰開くに比べて如何ほどか便宜であらう。望蜀の愁をいへば四編全部完成の上、各條に參照記號が加へられて年代別並に事項別索引が附せらるゝとである。新しい研究家の一層の努力を俟つものである。

（東京岩波書店發行、定價八、〇〇）

○民族性と神話

松村 武雄著

「自分が本書に於て考へて見たいことは、廣く世界の諸民族に互つて、さうした民族性・民族精神の特殊性、若くは個性が、民族の心的産物の一つとしての神話の構成内容をいかに決定してゐるか若くはそれが這般の内容にいかにか反映してゐるかといふ問題である。」

著者は序説に於て自らかく述べてゐる。由來民族性と神話との親近なる關係交渉は一應何人も心附くところであるが、これを專一の問題として組織的系統的に取扱つたところの研究としては從來多く見られなかつた、著者は進んでこの處女地に自ら最初の犁を入れたのである。

今その成果を見るに著者がその研究の初に當つて採つたところの方途は諸種の神話を分析してその内にそれらの民族の特性を新に見出さんとするのではなく、却つて既に他の方面の研究によつて一應諸種の民族の上に歸せられてゐるところの性情をそれらの神話の上に重ねて檢證せんとする仕方である。著者によればその方が「實質的に見て民族性民族精神と神話との交渉の問題の上に一層效果的であると考へられ」たからであるといふ、併しながらそのことは果して如何であらうか。勿論この二つの行き方は必ずしもしかく嚴密に一方的であることの出來ないものではあるが、筆者は寧ろ、神話自身から出發してその含む諸の意味がどの程度まで民族に固有なるものであるかを

吟味することが神話學者としての著者の本來の途ではなかつたかと思ふ。

兎まれ著者は右の如き見地から世界の諸民族の中より埃及人希臘人、羅馬人、北歐人、ケルト人、及び日本人なる六つの民族とその神話とを選び來り、それらを一つ／＼並列的にすべて同じ仕方で考察した上、最後に民族性の問題に關し各民族の神話の有つ證示力の大きなことをほゞ五つの原則にまとめて結論されてゐる。筆者はその所論に就いては敢て異議をさしはさむものではないが、著者の永き學問的經歷とその既往の業績とに顧みてこの度の新著が神話そのものゝ理解の上にも、また民族性の問題の把握の上にも特に新しきものを加へるところの甚だ少いのな些が物足らなく思ふのである。(菊判四三九頁、東京培風館發行、定價三、八〇)

○歴史教育論

新見 吉治著

近來一般歴史意識の昂揚の結果歴史教育の重要性も新しく識者の間に注意せられるやうになつたが、歴史の専門的研究の成果の花々しさに比べては歴史教育の實際に就ての反省はなほ頗る十分でないやうに思はれる。蓋し専門的研究家にとつては自己の問題とするところの歴史事實の解明のみが當面の關心事であつてそのことと教育的意味の如きは自ら別個の問題と考へられてゐるのみでなく、往々にして専門學者としての矜持が教育者たることを私に輕んずるが如き傾を伴ふからである。併しながら今日大學の史學科の卒業生の大多數は勿論、多少とも專

問史家として世に認められてゐる人々と雖、その多くは諸種の學校の教職に就いてゐる。而もそれらの人々は皆果して自分の職務とするところに對し十分なる反省と確乎たる自信を有つてゐるであらうか、——此度廣島文理大學教授新見吉治氏が歴史教育論として平素抱懷せらるゝところの意見を取經め公表せられたことは上述の如き現時の欠陥を補ふものとして洵に慶ぶべきことである。

著者新見博士は嘗て本會の大會に就て「讀史と修史」と題する講演をせられたことがある。その主旨とするところは筆者の記憶にして誤がなければ歴史の學問には史書を讀む方の側と、史料をもとゝして歴史を編む方の側とが存する。今日史家の事とするところは多く後者にあるが、我々はそのまへに讀史の一面のあることを知りその修養を怠つてはならぬといふやうなことであつたかと思ふ。

今此度の書も亦かゝる主張を根本命題として歴史教育の本質が主として讀史の側にある、その實質的並に形式的價值が如何にあるかを明にした後、歴史教授の實際に就いてその法式並に教材を巨細に吟味し、最後に成績考査の問題にまで互つて論述されてゐる。その所論の常に今日の教育の實情に即して然も單なる便宜論に陥らず、問々著者の識見の見るべきものあるを示されてゐるところ、行文の坦々として極めて平明に屢、日常の新聞記事その他卑近の例を引いてその論旨を反覆説明せられるところと並んで、如何にも自ら多年教育の實際にたづさはり來つた人の著として肯ばれ、近時の好著たるを失はないであらう(菊版四三四頁、東京同文館發行、定價三、五〇)(以上柴田)